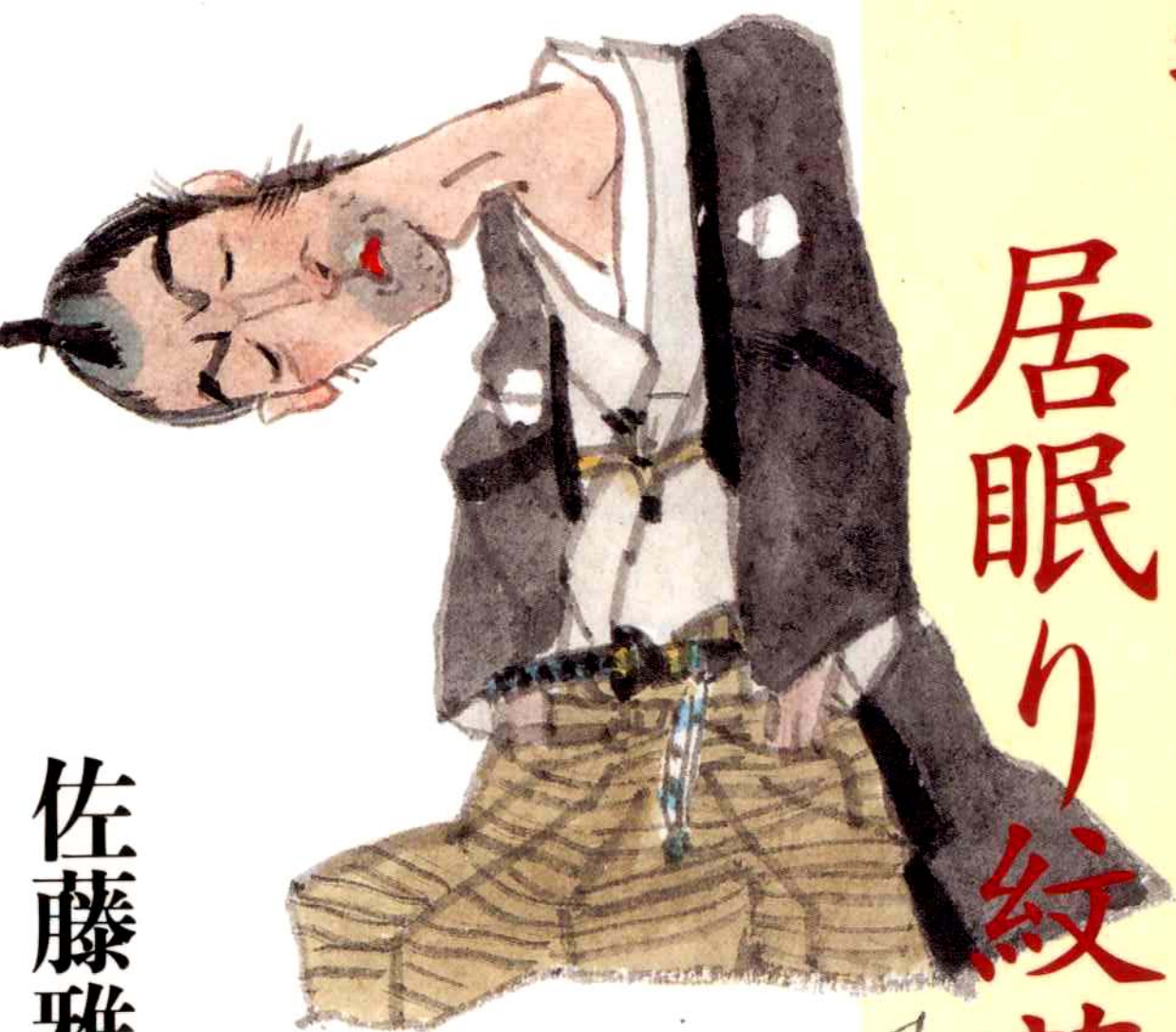


物書同心

居眠り紋蔵

あ



佐藤雅美

ものかきどうしん いねむ もんぞう
物書同心居眠り紋蔵

さとうまさみ
佐藤雅美

© Masami Sato 1997

1997年9月15日第1刷発行

2002年1月30日第12刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395 3615

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍業務部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——有限会社中澤製本所

ISBN4-06-263599-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆

講談社文庫

藏書章

もの かき どう しん い ねむ もん ぞう
物書同心居眠り紋蔵

佐藤雅美

目次

お奉行さま	7
不思議な手紙	45
出雲の神さま	83
泣かねえ紋蔵	121
女敵持 めがたき ち	169
浮気の後始末	219
浜爺の水茶屋	269
おもかげ	315
解説 縄田一男	362

物書同心居眠り紋蔵

お奉行さま

一

「ほう、それはいまだき珍しい」

空が青々と澄み渡っていて、日が中天にさしかかったところだった。届けを受け付けていた当番与力の一人蜂屋鉄五郎は、手にしていた扇子でピシリと股を叩いた。物書同心藤木紋蔵は、筆を止めて縁の下タタキにひざまずいている男たちを見下した。

羽織袴の家主が付き添っていて、白衣（着流し）の届け人は平べったい顔に団子のような鼻をのせている。

「この節は、捨物（落し物）などめったと出てこない。五両もの大金の入っている紙入となるとなおさらだ。いやまったく奇特なことだ。そのほう、大工の留吉と申したな。えらい」
届け人の大工留吉は首をすっこめて、

「拾ったのはあつしじゃねえんで」

蜂屋鉄五郎は早トチリしたらしい。

「では誰だ？」

「相長屋の隣りに住む、お光という十とおになる娘でございます」

蜂屋鉄五郎は首をひねった。

「親のかわりにおまえが来たのか？」

「はい」

「親はどうした？」

「母親はとうに亡くなりまして、父親てとおやも寝たり起きたり。いえむしろ寝込んでることが多いものですから、かわりにあつしがこう、お届けに参じました」

「あい分かった。子細を申せ」

紋蔵は筆を握りなおした。

「昨夜の五つ半（午後九時）ごろでございます。お光坊が親父橋を渡ってすぐの芳町で……」

「待て」

蜂屋鉄五郎が腰を折る。

「十の娘が夜出歩くにしては遅すぎる」

「その日のうちに、照降町てりふりの下駄屋げだやに、鼻緒を上げた下駄を届けなければならなかったとか

で、遅くなったのだそうでございます」

「父親のかわりにか？」

「さようでございます。父親は、元は下駄職人で、いまは内職仕事で歯を入れたり鼻緒をすげたりしてるんですが、注文を取りに行ったり届けたりは、もっぱらお光坊の受け持ちなんです」

「つづけろ」

「下駄を届けての帰り、親父橋を渡ってすぐの芳町で、何かにつまずいたので拾い上げてみると、それがずしりと重い……」

「五両も入っていた紙入だったと申すのだな」

「さようで」

「それで？」

「そこは人通りの多い通りですが、さすがに夜も更けていて通りすがりを見かけない。お光坊は宿に持って帰って父親に見せた。父親は、びっくりです。すぐさま留さんと、あつしを呼びにお光坊をよこした。こう見えてもあつしは信用があるんです」

「よけいな口は叩くな」

留吉はペコリと頭を下げ、

「あつしは大工で朝が早え。とうに寝んでいたのを起き出し、かかあと一緒に隣りのお光坊

の宿へ行つた。見せられた拾い物は縞の紙入で、紙入自体はてえした代物じゃなかったんですが、開いてみるとお宝がなんと五両も入ってる。あつしもびつくり仰天して、すぐさまお光坊と自身番屋に駆けつけたような、へえ次第でございます」

「紙入は持参しておろうな？」

「はい」

と家主が返事を引き取り、懷から、風呂敷に包んでいた縞の紙入を取りだしてさしだす。蜂屋鉄五郎は紙入を開いて、小菊らしい紙と金子をつまみだし、

「小判が五枚に、南鐐（二朱銀）が二枚……。しめて五両と一分。それに波銭が十枚に一文、銭が三枚で四十三文……」

紋蔵は蜂屋鉄五郎のいうがままを書き留めていった。

「印形とか書き物の類いは……」

蜂屋鉄五郎は紙入をひっくりかえした。

「何も入っておらぬ。金持ちのわりには不用心なやつだ。それとも、落としたら出てこぬものと、端っから決めてかかっていたか」

と金子を紙入にしまい、

「紙入と金子はこちらに預かっておくが、父親が寝込んでいることが多いというと、親子の暮しは楽ではないのだろうなあ」

「そりやもう。ご丁寧に下に鼻っ垂れが、いえいえ幼い弟妹が二人もいるものでございますから、赤貧洗うが如しというやつで……」

「そうか。それでいて、猫糞ねこふんせずに届け出たか。いや、できないことだ。親子ともども感心なことだ」

「お光は……」

と横から家主が口をはさむ。

「けなげな娘で、昼は手習にもいかず、一膳飯屋に皿洗いに出ています。孝子こうしの書上かきあげなどございましたら、真っ先に名を挙げようと、わたしら五人組の面々もつねづね話し合っているところでございます」

「拾い物が金子だと、三日晒さらしといって、三日の間自身番屋の前にでも立札を立ててその旨の張紙を張っておき、落し主があらわれたら、落し主も不念ぶねんがあつてのことだから、拾い主と落し主とが折半することになっておる。あらわれなければ六ヵ月後に、金子はそっくり拾い主のものになる。なにしろ大金だ。落し主はすぐにあらわれよう。だがそれでも折半ということになると、二両二分二朱に二十一文と五厘……」

と蜂屋鉄五郎は端数まで数え上げて、

「正直の頭こづねに神宿るとはよくいったものだ。お光親子には二両二分二朱に二十一文と五厘が授かることになる。いや、久方ぶりに、今日の天気のようにすがすがしい話を聞くものだ」

蜂屋鉄五郎はそういつて満足げに頷いていった。

「家主九郎兵衛は、すぐさま三日晒の手配をしろ」

「ははあ」

二

「藤木さん」

帰り支度をしているところへ、中村八之進が声をかける。紋蔵は顔を上げた。

中村八之進は声をひそめて、

「明日の当番、休ませていただきたいんですが……」

御番所（町奉行所）は北も南も、与力と同心が五組に編成されていて、各組が月に一度、六日ずつ当番をつとめた。中村八之進は紋蔵とおなじ三番組のおなじ物書同心で、この日は当番の五日目である。

「何ですって？」

紋蔵はわざと聞こえぬ振りをした。中村八之進は繰り返す。

「明日、休ませてもらいたいのですよ」

物書同心は一組ひとぐみに五人いる。三番組の五人いる物書同心のうち一人は臨時廻りで日中ずつ

と出歩いている。一人は吟味方下役で吟味方与力の下働きに追われている。二人とも当番所にはまったくといっていいほど詰めない。

当番所に常時詰めることができる物書同心は、例繰方の紋蔵と赦帳撰要方の中村八之進といま一人の三人だけだった。

物書同心の仕事は忙しい。

言上帳への帳付願い、帳消願い、公事訴訟願い、検使願い、見分願い、御救い願い、駄込および駕籠訴の願い、諸届けなど、江戸の町のありとあらゆる願い事や諸届けを筆記し、合間合間に落し物や紛失物はその届け帳に、欠落は欠落帳に、勘当や久離は久離勘当帳にと写しかえる。三人で分担してやっとなしきる。二人だときつい。それなのに中村八之進は当番を嫌い、理由を構えては休もうとした。明日もそうなのだろう。

「家内の実家で法事があるのです」

中村八之進の連れ合いの実家は、深川の結構な身代の小間物屋で、羽振りがいいのが中村八之進の自慢のタネの一つであるが……、法事かどうかはわかったものでない。

「いえ、本当なんです。こう見えても、町の衆にとってわたしは八丁堀の旦那ですから、わたしが出るのと出ないのでは、法事の盛り上がりもずいぶんちがう」

法事に盛り上がりも何もあつたものではない……。

「恩に着ます」